慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジョージ・リヒトハイム著 古賀信夫訳『ルカーチ』
Sub Title	
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1973
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.46, No.11 (1973. 11) ,p.120- 123
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19731115-0120

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

ジョージ・リヒトハイム著 古賀信夫訳 『ルカーチ』

ジョージ・リヒトハイムは「ある知的悲惨」(An Intellectual Disaster)と題するルカーチ小論を書いている。それは最初、*Encounter*, Vol. XX. No. 5. May. 1963, pp. 78-80 に掲載されたが、後に幾分修正されて、論文集 *The Concept of Ideology and the Other Essays*, New York, Rondom House, Vintage Books, 1967, pp. 245-255 に再録されている。この論文は、ルカーチの《社会主義リアリズム》と《モダニズム》批判をめぐつて、主として彼の美学思想に批判的照射をあてたものだが、その最後の一節にはつぎのように書かれている。

その偽らざる帰結は——彼の批判的な仕事のたんなる量が、そして時折、十九世紀ヨーロッパ社会の幾つかの苦境に対してひらめく洞察力の質が、いかに印象的であろうとも——ヒトラー＝スターリン時代の重大な災害のうちにかぞえられねばならない。知的破滅というものは、その効果が認められないゆえに、また、社会が実存の限界領域へとますます追放してしまつた次元にそれが関連しているがゆえに、それだけ真実さが乏しいわけではない。彼は、あらゆる形態における近代性に対して真に批判を加える代りに、東西ともに工業文明の抱える差し迫つた諸問題を回避してしまう単純化された二元論に移調された、独断論的著述の厖大な全集を創作したのだ。つまり、真正な弁証法的マルクス主義に代つて、単純化されたレーニン主義的立場への盲目的なコミットメントが、真の論争に代つて、冷戦についての紋切型の言葉がそこにある。六十年間の熾烈な、広範囲にわたる活動の終末にあたつて、ルカーチは、読者が彼から期待する権利を有していた思想的綜合を失効させたばかりではない。彼は、みずからの権威の重みを政治的・文化的逆行に委ねてしまつた。それは、この悲惨な時代の知的悲惨の最悪なもののひとつである。

このルカーチの知的悲惨は、彼の場合にはその擬似的な従順さというべきなのか、マルクス主義に特有なものと必ずしも言えないとしても、ソヴェト正統性とのイデオロギー的かかわりという個人的体験に起因していることは疑い無い。しかしながら、《現代の思想家》叢書の一冊『ルカーチ』論のなかで、リヒトハイムが述べているように、「ルカーチは、生涯を通じて多くの仮面をかぶつてきたし、また計算された上でのごまかし、和解、卑下といつた行為を行つてきた。それは、彼が選んだ世界を標準として見ても異常なものであつた」(一三六頁)。とくに一九三〇年代における彼の活動は、「いわば脳葉無痛切除手術をうけて、脳の一部を取り除いたあとモスクワ宣伝者たちのスローガンで補つた男の産物としかいいようのないもの」(一一二頁)であつた。

リヒトハイムは、若いブルジョワ知識人であつたルカーチが新プラトン主義者から出発し、一九一四年以前のドイツの多彩な精神風

土につつまれながら（リッケルト等の新カント派、ディルタイおよびジンメルの生の哲学、フッサールの現象学、ウェーバーの社会科学、さらにシュテファン・ゲオルゲを中心とする詩人サークル）、マルクス主義者となつて行く、つまり『魂と形式』の著者が『歴史と階級意識』の著者へといかに変貌したか、その思想的軌跡を簡潔にたどつている。だが、「ルカーチはヘーゲルをへてマルクスに到達し、それから、すでに『歴史と階級意識』で着手したオリジナルな主義主張を否定することによつてレーニン主義に到達しているが、一九二四年には古い自己を脱ぎ捨て、どう見ても完全に自己を変貌させているからである。事実上レーニン主義への政治的動向によつても、世界の性質や人間の運命について、彼が一九一四年以前に身を委ねていたある一般的命題の真実性を消し去りはしなかつた。つまり、ルカーチにとつて真実は、絶対的・客観的かつ非経験的なものであつた。その妥当性は実証主義的な意味での《科学》によつても、非合理的な盲目の信仰によつても保証されず、リアリティの真の性質への直観的洞察によつて保証されるのだ。つまり、ヘーゲル哲学がそのモデルを示している知的操作によつてなのである」（二七頁）という指摘は、きわめて重要である。

ルカーチは、ベラ・クーンの創設した共産党に一九一八年十二月末に入党している。それ以前に彼は、ハンガリーの外では殆んど無名な理論家E・サボーの影響を強く受けていた。リヒトハイムは両者の接触をかなり詳細に述べている。一九一九年のハンガリー革命はルカーチにとつて決定的なものであり、彼自身、教育人民委員として重要な役割を果した。と言つても、この革命の惨澹たるエピソードは、生き残つた指導者L・カッシャークの回想から推察されるとおり、哲学者、詩人、美学者たちの論争に明け暮れ、ヘーゲル、マルクス、キルケゴールからヘルダーリン、ノヴァーリスの引用がとびかう、まつたく非現実的、非政治的なものにすぎなかつた（五九頁）。ともかく、一九二四年のコミンテルン第五回大会におけるジノヴィーエフの批判を俟つまでもなく、「サボーのアナルコ・サンジカリズムからルクセンブルクの革命的社会主義へ、それからレーニンへというルカーチの知的発展が彼を危険人物にしてしまつた」（七二頁）わけである。

『歴史と階級意識』は、精神の弁証法的活動に内在する自己活動的過程についてのヘーゲル的観念を復活し、マルクス主義解釈において、プロレタリアートの革命的自己意識が歴史の主体＝客体、あるいは《実践》の弁証法的総体であることを強調する。さらにルカーチは、エンゲルスの《科学的》唯物論を平然と無視して、初期マルクスへと回帰する「異端思想」を表明したのである。リヒトハイムはこう述べている。「このように初期マルクスの立場への復帰を果すことによつて、ルカーチは正統派から分離し、しかも、人間の精神と根源的に無縁な外界の模写（Abbild）という《唯物的》認識論を認めるのを拒否することによつて正統派の攻撃に結着をつけた。こういつたすべての点において、彼はヘーゲルおよびマルクスに忠実であつたと主張してもよかろう。彼の思考過程で中心的役割を果す《総体性》のカテゴリーは、マルクス自身がその理論に織り

込んでいる観念的遺産の部分をなしているものなのである。『資本論』の著者はヒューマニストであり、彼の経済学研究はブルジョワ社会の哲学的批判を具体化したものである、という発見は、『資本論』の未刊行の草稿――一八五七年――五八年の『政治経済学批判綱要』――がやっと一九三九年から四一年にかけて陽の目を見た時受けるはずであったあの確証を依然として欠いていた。しかし記録上の証拠なしにではあるが、晩年のマルクスが故意によそおっていた実証主義の仮面をルカーチは直観的に見破っていたのだ。こういったすべては全くけしからぬことであり、したがってモスクワが一旦合図をすれば、ルカーチを襲う非難の奔流がなぜおこるのかという理由をも明らかにする」（八四―八五頁）。

ところで、ルカーチはドイツ古典哲学に注目したばかりではない。彼の哲学的な仕事が文芸批評から始められたことを想起すべきであろうが、シラー、ゲーテ、トーマス・マンなど、ブルジョワ古典文学の芸術作品の分析にもすぐれた才能を発揮している。『歴史小説論』『シラーの美学に寄せて』『ゲーテとその時代』などの著作に、本書の半分が割かれており、最後に、「美学のマルクス」の地位を要求せんとする七十八歳のルカーチの大作『美の特性』が取りあげられているゆえんである。「彼が彼独自の領分として美学を選んだことは偶然ではなかった。なぜなら芸術の世界では、恐らく他の領域とも違って、歴史における《主体＝客体の一致》を写しだそうという意図にかなりの成功の見込みがあるからである」（一七九頁）とリヒトハイムが指摘しているように、まさに美学の領域において、ルカーチは、人間がみずからの労働によって世界と自己自身とを変形する、という確信に充ちた地点に到達可能であったからである。けだし、美的過程における「主体＝客体の一致」としての芸術こそ、類としての人間の自己意識を形成するものであり、ルカーチによれば、けっして想像力の恣意ではなく、真に生産的な、「客観的な」価値創造、世界についての真実の「反映」にほかならないのだから。かくして、『小説の理論』の冒頭のあのリリカルな叙述、「自我と世界との本質的な差異」「魂と行為との不一致」というロマン主義的な世界苦から、ルカーチは解放されたのであるが、それは少なくとも政治の世界からはもっとも遠く隔った彼方である。リヒトハイムは、R・ウェレクの言葉を以て本書を結んでいる（一七九―一八〇頁）。

大まかにいえば、十八世紀中葉からゲーテの死にいたるまでのドイツ文学全体には、ある一つの基本的な統一性がある。それはフランス十七世紀の場合とは異質の新しい芸術を創造する試みである。つまりそれは正統派キリスト教でもなく十八世紀啓蒙思想でもない新しい哲学を企図することである。この新しい見解は、人間の能力の全体性を強調する。つまり理性だけをあるいは感情だけを強調するのではなく、むしろ直観つまり「知的直観」や想像力を強調する。それは神と現世との、魂と肉体との、主体と客体との一致に到達した新プラトン派の復活であり、汎神論思想（正統的信仰にどう譲歩していようとも）ないし二元論思想の復活である。こういった思想の提唱者たちは、自らの考えの不確かさやむずかしさをいつも意識していた。こういった考えはしばしばかなたの理想としか思われなかったからである。したがってドイツロマン派のあの

「永遠の熱望」つまり進化の強調や理想への手さぐりとしての芸術の強調はここから生まれるのである。

最後に、本書の翻訳について付言して置くと、逐一、原書と対比したわけではないけれども、幾箇所か不適切なところが眼につく。例えば四二頁（原書三六頁）は三行ほど欠落している。七〇頁（同五五頁）には『歴史と階級意識』は……いつも当面の問題にしっくりあてはまるという性格をもっている。それはルカーチがハンガリーにおけるマルクス思想の展開の地平を奪い返したやり方によるのである」とあるが、これは明らかに誤訳であり、「『歴史と階級意識』が……今なおひき続いて有意味であるのは、ルカーチがマルクス思想のヘーゲル的次元を奪回したその仕方にある」と訳すべきであり、またその直後に来る文章中の「まったく単純な動機」というのも、文意のうえから「さらに単純な動機」としなければならない。七八頁（同六一頁）の「唯物論と唯心論の間の陳腐な論争に終止符を打つような純粋に唯物論的な論理」は「弁証法理論」の間違いである。その他、訳語の不統一など、本書が初学者のためのものであれば、ルカーチからの引用文は、すでにすぐれた著作集の邦訳が出揃っている現在、それらを活用して然るべきであろう。

（新潮社　二〇二頁　一九七三年）

奈良和重

清水幾太郎著『倫理学ノート』

I

「科学と人間との間に横たわる湿原へ踏み込んでしまった」著者が、一九六八年十一月から一九七二年四月まで、ほぼ三ヶ年半にわたって、『思想』に連載した文章に、「余白」をつけ加えて成ったのが本書である。

「この奇妙な書物……」と、著者が「余白」のなかで書きはじめているように、『倫理学ノート』は、二十世紀の倫理学の本流である、ムアとその後継者の学説を受けいれようとして、受けいれることのできなかった、著者のとまどいを表わしたものである。けれども、未だ『倫理学ノート』であって、『倫理学』でないとはいえ、著者が何を批判し、何を擁護しようとしたのか。批判しようとしたのは、(1)自然主義的誤謬、(2)価値判断、(3)効用の個人間比較、(4)無意味な命題を禁止しようとする「科学」であり、擁護しようとしたのは、功利主義やプラグマティズムである。功利主義、プラグマティズムという言い方は不十分だろう。彼が擁護したいものは、「人